



◆すいせんの言葉

全国視聴覚教育連盟事務局長

関口 勇

この映画をみてびっくりするのは、牛乳を生産し加工する方法が、千三百年余りも昔、渡来人によって仏教と共にわが国にもたらされ、その加工品が租税として納められていたことである。全く初耳で興味は一段と高まる。

このお話の主人公、弓彦も福児も共に、勇気あり知恵あり行動力あり、個性味がよくでている。弓彦は山を駆けめぐる、福児は両親を助けて家業に励むという生活を異にしながらも、この二人いかにも子どもらしい純情さに溢れていて、みる子どもたちに自然と親しみやすさを感じさせる。

さらに、舞台としての山の風景も、一見墨絵風の落ちついた立体的描き方で画像に一層の深みを増し、素敵に感じる。

初めはどうもなじめなかった福児と弓彦だったが、盗

うみ わた うしか しよねん
海と渡ってきた牛飼少年
ふじ ゆみひこ
福児と弓彦

◆企画

雪印乳業株式会社

◆製作

株式会社 桜映画社

◆規格

アニメーション・カラー・20分

◆価格

16ミリ/170,000円(消費税別)

賊に向かっての戦いに助けつ助けられつしているうちに、互いに気心もわかり協力体制がおのずと出来て、大人たちの先頭に立って大活躍をする。こうした福児と弓彦との友情がもたらす異民族融和と交流こそ大切なことで、この二人は大いに称讃されてよい子どもたちだ。互いに知り合い理解することの大切さを気づかせ、今日的意義は真に大きい。

もともと、牛を飼う人びとと農耕を営む人びとは全く異なった生活文化をもっている。この人たちが各々の生業を支え、村の平和を維持するために、何のこだわりもなく協力体制ができたことは誠にすばらしい。自然の中に国際性が芽吹いたということであろう。

子どもと一緒に大人もみて、映画の心を汲みとれるよう話し合いたい。

◆配給



1 税を納めに集まる人びと
里長の家に租税を納めに、村人たちが集まってきた。福児の村からは壺に入れたものを、弓彦の村からは米を運んできた。



2 牛の乳をしぼり、こす人びと
壺の中のものは、牛乳からつくられた、今のチーズのようなものだった。牛乳は、朝鮮半島の人びとによって7世紀半ばに初めて日本に伝えられたのだ。



3 牛の世話をする福児
野うさぎを追っていた弓彦は、不思議な村を見つける。そこは、牛を飼う牧場のある、福児の村だった。



4 暗闇の中の賊
ある晩、盗賊が弓彦の村を襲い、大事な米を奪っていった。同じ夜、福児の村でも大切な牛を盗まれてしまった。



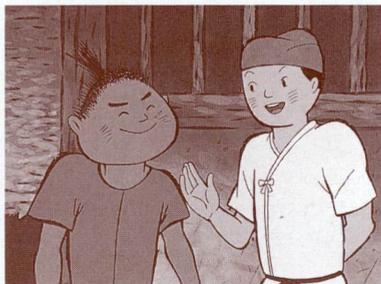
5 牛のあしあとを追う福児
二つの村の人びとは、すぐに賊を追いかけたが、相手は強く、命からがら村へ逃げ帰った。しかし、福児と弓彦は諦めず、別々に賊のあとを追った。



6 弓彦を助けた福児
賊に見つかり、危ないところを弓彦に助けられた福児。弓彦もまた、福児に助けられた。



7 橋の下で賊を待ち伏せる二人
協力して奪われた牛や米を取り戻した福児と弓彦は、追ってくる賊たちを橋で待ち伏せ、撃退する。



8 にこやかに話をする二人
無事に村に帰りついた、福児と弓彦。「お前、なかなかやるなあ」「お前もな」



9 酒をくみかわす二つの村の人びと
この事件をきっかけに、二つの村の付き合いが始まり、お互いに助けあい仲よく暮らすようになった。

◆牛乳・その後

遠い昔、わが国の一部には、牛乳や乳製品を利用する人々がいましたが、その後は国の中で戦争が多く、牛を飼わずに馬を飼うようになったため、牛乳は利用されなくなっていました。

しかし、千年以上もたった明治時代からは、欧米のように牛を飼うことがたいへんさかんになったので、みんなが牛乳を飲んだり、乳製品を食べるようになりました。

◆対象・用途

- ・小学校(高学年): 社会科・歴史、国際理解
- ・学校映画教室
- ・地域社会活動:
児童館、子ども会の映画会、親子映画会



◆製作スタッフ

- 製作 = 村山英世
- 脚本 = 岡本忠成
東川洋子
- 演出 = 馬場 健
- 原画 = 古佐川吉重
江口麻吏介
- 美術 = 青木 稔
- 撮影 = 高橋明彦
- 作曲 = 広瀬量平
- 編集 = 相沢尚子
- 録音 = 甲藤 勇
- 現像 = IMAGICA
- 語り = 草野大悟